

安倍能成

漱石先生二題



漱石先生二題



## 先生と謡

私が先生に始めてものをいった機会が、謡であったということは、前に書いたと思う。実際先生や私が高濱さんの勧めによって謡を習い始めた頃には、初心者謡いたい盛りということもあり、謡の為に会うことも多く、又会えば必ず謡うという有様であった。その頃野上、小宮や私の属して居た会は清嘯会といって、神田錦町の或

家の二階を借りて、週に一度ずつ宝生新氏と尾上始太郎氏とに出張してもらって居た。先生の方は新氏が宅へ出稽古に行つて居たのであるが、それが休みになつたりした時、先生は我々の方へ時々出張して稽古してもらつた。先生は我々の方へ時々出張して稽古してもらつた。先生もこの熱心であつた。月一度の謡会にも初は先生も忠実に出席された。私の宅、それも二間か三間の陋屋で、やった謡会などにも、先生はこのこやつて来られたが、その後色々な理由で当初の熱は次第にさめて来た。併しなくなられるまでずっと続けてうたつては居られたと思ふが、私のその辺に就ての記憶は確かでない。

先生は謡を一つの遊び若しくは養生の一つと考えて居られたらしく、稽古は割に熱心であつたが、強いて上達を期するといふような緊張はなかつた。節扱いなど細かに器用な所があつたけれども、大体は放膽なあまり拘泥しない謡い振りであつた。先生の声量は随分豊富であつたが、まだ十分洗煉されて居ないで少し濁つて居り、又鼻にかかつて居た。その上先生は脇宝生を習う前に、あまり上手でない先生に上掛り宝生を習われた為か、謡に癖があり、それは殊に詞の部分に於て甚しかった。実をいえば私は先生の謡はあまり好きでなかつた。先生の表

現の中で謡は一番劣つて居るとさえも思つて居た。

それにつきはつきりと記憶して居ることが一つある。

正月だったかと思うが、早稲田南町の漱石山房に行き、例によつて謡をうたうことになった。その時私は何のきっかけか、又きっかけなしにか、「私は先生の謡は嫌いです」といった。これは私の平素の感じをそのままいつたのであるけれども、私の表現は時によつて不必要にきつくなつて、無用に相手を緊張させることがあるが、その時のもまさにそれであつた。その詞に対して先生が「僕も君の謡は嫌いだ」と応酬された詞の中には、多少の激



昂があつたらしかつた。こういういきさつの後、先生のシテで私は「羽衣」のワキを謡つた。そういう経過の爲か、その時の謡いぶりは先生も私もいつもより緊張した好い出来だつた。

### 裏天のこと

先生が大学を出て暫く高等師範学校に勤めた後、松山中学へ行れた時の気持は、世の中を捨てる気持だつた、ということをお口ずから先生から聞いたことがある。それ

から熊本の第五高等学校へ移って洋行し、東京へ帰ってから明治三十年代末に先生の創作活動が始まるに至るまで、先生には親しい友達もあり、先生の人徳を慕って集る学生達も多かったけれども、全体としては孤独な寂しい生活を送られたろうと思う。併し先生の創作活動は一挙にして先生を社会的に著大な存在たらしめたのみならず、又先生の周囲に新たに純真な敬愛の情を捧げて先生に向って来る青年を集めるようになった。私は国の中学に居た時、先生の後輩である或る文学士の先生は、「夏目さんは文章は書けるのだが、冷静なたちだから何も書

くまい」という話を聞かされたが、先生を深く知らない人は、先生の外形からそういう判断を先生に対して持つて居たのであろう。先生が盛に作品を発表して後も、先生の所謂「非人情的」小説から、先生の熱情を看過するものも、極めて多かつた位である。それはさて措き、純粹で人懐こい先生が、こういう純粹な崇拜者の心持を嬉しく受けたことはいうまでもない。恐らく先生が小説を書き始めた明治の末年頃は、先生にとって一番心の暖かく生活の賑かだった頃であつたらう。

けれども青年も次第に年を取り、独立の存在となるに

従つて、生意氣になつて来る。先生を崇拜した連中のこ  
うした心持の変化が、敏感な先生に反応しないというこ  
とはない。小宮が『続書簡集』の解説に引いた、小宮自  
身にあてた先生の手紙の如きは、まさにその気持を示し  
たものである。尤もこの感じは例えば小宮の如く先生に  
一心に打ちこんだ人間に於て殊に甚しく、私の如く比較  
的関係の淡い人間には、それ程でもなかつたであらう。  
併し私自身に於ても、程度の差こそあれ、先生に傾倒し、  
先生の知遇を有難いと思ひ、先生からも幾分の敬愛を寄  
せられた時期、先生を批評的に見、先生から生意氣な奴

だと見られた時期を経、その時期を十分卒業しない内に、先生の死に会ったという点では、小宮達と同じである。勿論こんな感情の曲折を通じても、私達の先生に対する敬愛、先生の私達に対する心持には、一貫して諭らぬものがなかったのではない。けれどもこういう私達の心持が先生を寂しくもし、不愉快にもしたことも亦事実である。考えて見ればこういう現象も亦、人間と人間との間には免れ難いことである。私は殆どあらゆる私の親しい友人に対してこういう気持を経験して居る。第一期の正に対する第二期の反、この二つの対立の綜合が出来ない

中に死んでしまった友も、その対立がそのまま発展しなかつたものもある。そうしてそれが兎に角綜合されて友情がゆるがなくなつたものも少しはある。漱石先生にはこのいわば弁証法的綜合のまだ完成しない中に死なれてしまつた遺憾を禁じ得ない。

先生のなくなられる少し前の大正三四年の頃だったと思うが、私が私自身の天分の少いということに氣にして、大分苦しんで居たことがあつた。勿論こういう苦みは、何もその時に限らないけれども、近頃はそういう点にくらかの落著きを得るようになった。その時私の一友人

は、私のそういう心持を憐み、一挙にそれを卒業させてやろうと思ったのであろう、私の学問上の素質その他に就ての外の友人達の私に対する有利でない批評を私に伝えて、私をペシヤンコにしたことがあった。その時にその友人が又一人の友人から聞いた漱石先生の詞として私に伝えたのは、「安倍は裏天だ」という一語であった。その当時の私にこの痛烈な先生の評語は随分のシヨツクであった。裏天というのは謙遜なような顔をして居て自惚れて居るという意味である。一人の人間に与えられる評語としては最も有難からぬものである。先生からその

当時生意気な、だらしのない奴と思われて居た小宮、鈴木、森田達にしても、しようのない天狗だとは思われて居たかも知れないが、裏天という感じを与えたのは恐らく私ばかりであつたろう。これは恐らく私の反省による謙遜と、誰彼と比べて自分を主張する自惚とが、両方共に煮え切らないものであつて、それがぎこちない対立をして居た姿を、先生に見破られた為であろう。私の今でも明かに記憶することは、先生のこの評語を聞いた時、私は自分でそれを否定し得なかつたということである。先生が直接に私にそれをいわなかつたこと、又一人の友



人が直接にその評語を私に伝えてくれなかったことを遺憾とする気持などは私には一つもなかった。

私は今でも決して裏天でないとはいえない。裏天ということは、私の人間否人間の内生活一般に於けるこれも弁証法的発展上、或る点まで必然的なものだといえなくもない。自己の反省と自己の主張とは、我々の生活には欠く可からざる契機である。私は裏天的現象を呈する私の反省も主張も共に煮え切らないものであることを認めると共に、私が特に裏天と見られたことが、私の反省と主張とが共に少しは人より強烈なせいだということを確認

めざるを得ない。そうして私は私の裏天を認識し、これを揚棄する処に、私に幾分か特有な道徳的生活の意義を認めるものであると共に、その道程に於て多少の進歩をも認めるものである。「それが即ち貴様の裏天だよ」というものがあっても、私は今はしよげない。何れにしても先生の「裏天」の一語は私にとって意味多く、肝銘の深い詞である。

(昭和十二年四月一日)





日本文学電子図書館

---

漱石先生二題

著 者：安倍能成

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録  
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

---

日本文学電子図書館